太洋基礎工業の「今」をお届けする社外報

たいよう新聞

490号
11月10日発行

採用活動 REPORT

過去2年間の新卒定着率100%!

認知度向上と「巻き込み型」採用で出会いから入社後まで!

近年、当社では「過去2年間の新卒定着率100%」を実現しており、全国の支店と連携しながら、一人ひとりに向き合う採用活動を進めています。AIが進化する今だからこそ、大切にしたいのは「人と人とのつながり」。採用担当者の強いこだわりと、進化を続ける採用活動の裏側をご紹介します!



名鉄大同町駅の採用看板広告

皆様の目に留まり、当社を知ってもらいたいとの思いで作成いたしました。
実は私のオリジナルデザインです!

本社総務部
採用担当
Tさん



世の中には数えきれないほどの企業があります。その中で、当社を知らないまま就職先の候補から外されるなんて、もったいない!
一人でも多くの方に「こんな面白い会社があったんだ!」と思ってもらえるよう、知恵を絞り、自ら行動し続けます!

一人ひとりと向き合う選考フロー

会社説明会 ▶ SPI適性検査（応募者の強みや個性を把握し、面接での相互理解を深めるための性格診断） ▶ 現場見学（※現場見学は現場都合によります） ▶ カジュアル面談 ▶ 面接

AI時代に問われる、採用担当者のこだわり

AIの進化により、業務が効率化できる時代になりましたが、採用は単に条件の合う人材を探す仕事ではありません。応募者一人ひとりの不安や希望に耳を傾け、会社と人が、お互いに未来を託せる信頼関係を築くことこそ、採用担当者の大切な役割だと考えています。
採用広報も、AIによる、似たようなデザインや装飾では、企業の個性が埋もれてしまいます。だからこそ、駅看板広告だけでなく、パンフレットやチラシ、Instagramも、一つひとつ自らデザインしています。

進化を続ける採用アプローチ



ゲーム感覚で行う「施工管理ガチ体験」

インターンシップのテーマを「施工管理、ガチ体験。」に刷新しました。現場の写真から危険箇所を探す安全管理ミッションや、測量機器に触れる「測量チャレンジ」など、建設の仕事をゲーム感覚で学べる工夫を凝らしています。

当社のリアルを伝えるカジュアル面談

入社後のミスマッチを防ぐため、面接前のカジュアル面談を充実させました。仕事内容や職場環境、遠方現場への対応、直行直帰、出張、宿泊、その他就業上の不安や必要な配慮事項に至るまで、現場のリアルな実態をお伝えしています。良い面だけでなく、建設業ならではの厳しさも包み隠さず伝えることで、相互理解を深め、入社後のミスマッチ防止につなげています。

緊張を笑顔に変える！アイスブレイク大作戦

2026年度新入社員研修会と内定式では、参加者の緊張をほぐし、自然に交流できるようアイスブレイクを企画・実施しました。楽しみながら打ち解けられる場づくりには自信があります！
（写真は2026年度新入社員研修会の様子）

成果や手応え

看板広告による認知度向上と信頼関係の構築

間口を広げるために大学最寄り駅などに掲出した看板広告には、「○○大学卒業生○○名活躍中！」といった具体的な採用実績を明記。さらに、プロのモデルではなく実際の卒業生を看板に起用しました。これにより、大学教授から「卒業した○○君の看板が見えて嬉しい」というお声をいただくなど大学側との結束が強固になり、事前認知度向上につながっています。また、Instagramにて社員紹介や社内行事、各支店の取り組みなど、当社のリアルな魅力を発信し続けた結果、Instagramをきっかけとした応募も増えてきています。

過去2年間の新卒定着率100%を実現

マッチ度の高い採用に加え、年齢の近い他部署の社員をメンターに設定する「メンター制度」の導入など、入社後のフォローもより手厚くしました。現場に出る機会が多く他部署との関わりが薄くなりがちな若手社員も、この制度によって社内コミュニケーションが大きく改善され、過去２年間の新卒定着率100%という大きな成果につながりました。



@TAIYO_KISOKOGYO

「#本気の福利厚生」「#支店紹介シリーズ」「#出張シリーズ」「#社員の休日」「#採用情報」など、幅広いテーマで発信しています！

Iさん流『採用活動の心得』

「全国のどこにいても、当社の魅力を直接届けたい！」という思いから、待つだけでなく自ら全国各地の採用イベントへ足を運んでいます。本社の採用担当が直接赴き、各拠点の社員と連携することで、現場のリアルな声と熱量を自分の言葉でお届けしています。



採用活動に一貫して携わる！

「企画を考える」「社内を巻き込む」「実行する」「反応を確認する」「次年度に向けて改善する」。この採用活動の一連の流れに、一貫して携わることを心がけています。その際、私一人が独り歩きするのではなく、あくまでも社内を「巻き込む」ことを意識しています。採用活動で何よりも大切なのが、「社員全員で新しい仲間を迎える」という気持ち。各支店の社員にも協力いただきながら、会社全体で未来の仲間を迎える採用活動を目指しています。

Instagramは週1投稿を目標に更新中！

求人票だけでは分からない「太洋基礎工業の日常」を、写真とともにタイムリーにお届けできるのがInstagramならでは！「こんな会社だったんだ！」「こんな社員がいるんだ！」と、当社をもっと身近に感じていただける内容を、これからも発信していきます。ぜひフォローして、当社の「今」を覗いてみてください！

未来を担う人材と出会いたい！

私が採用したその「1名」が、10年後、20年後に当社の一翼を担う人材になるかも……。そう思うと、ワクワクしてたまりません！新しく加わる仲間には、末長く活躍してほしいと心から願います。

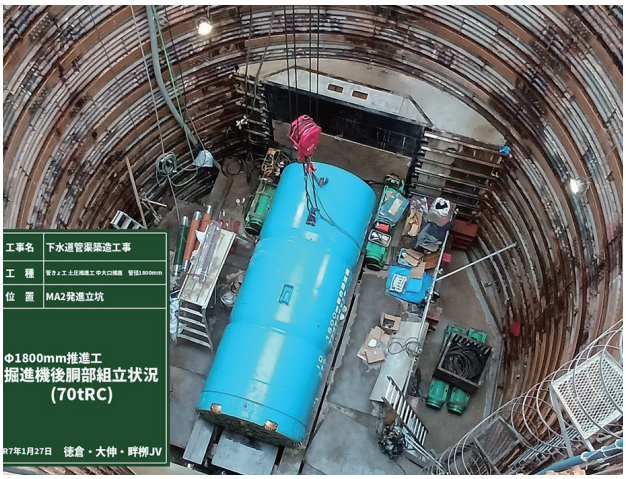
最前線レポート

硬質な岩盤と急カーブに挑んだ下水道管渠築造工事

太洋基礎工業が担当したさまざまな現場を紹介するこの企画。今回は愛知県岡崎市における、土圧式推進工法を用いた雨水管の布設工事をご紹介します。硬質な岩盤や急な曲線といった困難な条件下で、どのような工夫で施工を進めたのでしょうか。

現場概要

現場名	下水道管渠築造工事
施工期間	2025年1月～6月、2025年11月～2026年6月
場所	愛知県岡崎市広幡町
発注者	岡崎市上下水道局下水道課
元請	徳倉建設株式会社、大伸建設株式会社、株式会社畔柳組
現場体制	太洋基礎工業株式会社１名、他12名
施工目的	推進工法による雨水管の布設



▲掘進機後胴部組立状況



名古屋支店 工事部
主任 **S さん**

現場の特徴

硬質な岩盤と急カーブでの推進工事



現場は閑静な住宅街で、小学校の一角を作業ヤードとして使用したため、周辺の児童や住民の皆さんへの配慮を徹底しました。この現場には大きく2つの難所があり、1つは非常に硬い岩盤層、もう1つは1800mmの推進管を通すルート上に存在する「65R」（曲線長約88.9m）の急カーブです。これらの難所をクリアするため、本工事では土圧式推進工法（CMT工法）を採用。加えて、近年では珍しい刃口式推進工法も併用するなど、当社としても難度の高い現場でした。



苦労した点と乗り越え方

こまめな測量と工法の工夫で困難を打開

最も苦労したのは、急カーブの精度確保と硬い岩盤の掘削です。カーブの精度を保つため、測量の頻度を増やしました。通常は推進管１本ごとに行う測量を半分の長さで実施し、機械の位置や向きを細かく把握しました。また、人力掘削が基本の刃口式推進工法の区間は、岩盤の硬さから困難を極めました。そこで、電気式の機械を導入しつつ、ハードロック工法を採用。あらかじめ600mmの芯抜きを行い、岩盤を割れやすくする工夫を施しました。



現場を振り返って

職人との対話から学んだチームワーク

硬い岩盤に阻まれ進捗が上がらない状況の中、現場で地道な掘削作業を続ける職人の存在の大きさを、改めて実感しました。ときには施工方針を巡り、意見がぶつかったこともあります。それでも、互いに歩み寄ることで解決を図ってきました。今回の経験を活かし、今後の現場でも、相手の気持ちを考えた対話を心がけるつもりです。周囲への感謝を持ちながら、日々の業務に取り組みます。

印象深かった出来事

刃口式推進の到達地点は、すでに稼働している既設のマンホールでした。雨が降ると下水が流れ込むため臭いには悩まされましたが、このマンホールが地域の安全な暮らしを守っているのだと肌で感じられ、インフラを支える建設業としての使命感を改めて強く抱きました。

声援



名古屋支店
環境開発部長　**A**さん

AIと人の知恵を融合し、付加価値の高い仕事へ

建設業界では、人手不足や技能者の高齢化が大きな課題となっており、ＡＩやデジタル技術の活用が急速に進んでいます。これからの現場は経験や勘だけでなく、最新技術と人の力を融合させ、生産性や品質を向上させることが重要です。ＡＩが人に代わるのではなく、人が中心となり、付加価値の高い仕事に集中できる環境を整える。そして、職人の方々が培ってきた知恵を、新しい技術とともに次世代へ継承することが、今後の成長には欠かせないと考えています。

年齢や経験にかかわらず、意見を出しやすい環境に

現場運営や業務改善において、管理職が常に最適解を持っているとは限りません。若手社員や現場担当者との何気ない会話の中に、新たな価値創造のヒントが隠れていることもよくあります。だからこそ、年齢や役職にかかわらず、誰もが意見を出しやすい環境づくりが何よりも大切です。日々のコミュニケーションを通じ、次世代を担う若手が自信を持って自発的に現場を動かせるような組織風土を築いていく。その成長の軌跡を見ることが、私にとって最大のやりがいであり、喜びでもあります。

秋の夜長に。脳の疲れをリセットする

デジタルデトックス



「しっかり寝たはずなのに疲れが取れない……」。それはスマホによる脳の疲れが原因かもしれません。今回は、就寝前１時間のスマホオフで脳を「休息モード」に切り替え、睡眠の質を劇的に向上させる「デジタルデトックス」のコツをご紹介します！

睡眠の質を劇的に変える習慣「就寝前１時間のスマホオフ」のススメ

現代社会において、デジタル機器を完全に手放すのは現実的ではありません。そこでおすすめしたいのが、「就寝前１時間」に絞ったプチ・デジタルデトックスです。就寝の１時間前にスマホの電源を切る、あるいは手の届かない場所に置くことで、脳への余分な刺激が遮断され、脳はスムーズに「休息モード」へと切り替わります。



実践！デジタルデトックスのコツ

01 寝室にスマホを持ち込まない

最も確実な方法は、寝室とスマホを物理的に引き離すことです。充電場所はリビングに固定し、目覚まし時計はスマホのアラーム機能ではなく、専用の時計を用意しましょう。「つい触ってしまう」環境を作らないことが大切です。

02 「おやすみモード」を活用する

夜の決まった時間になると通知がオフになる、「おやすみモード」を設定しましょう。
また、画面をモノクロ表示に設定するだけでも視覚的な刺激が減り、スマホを見続けたいという衝動を抑える効果があります。

03 デジタルに代わる「アナログな習慣」を取り入れる

スマホを見ない１時間を退屈に感じないよう、リラックスできる別の習慣を見つけるのが長続きの秘訣です。

- **温かいハーブティーやホットミルクをゆっくり飲む**
- **お気に入りのアロマを焚いて、軽いストレッチをする**
- **その日にあった「良かったこと」をノートに書き出す　など**

